

ヌメラのいる生活

餅は餅や

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アパート暮らしを始めたばかりのトネの下に突如として現れたのは、ワインレッドの
キヤスケット帽をかぶつたヌメラだつた。ヌメラから粘液でふやけきつた手紙を受け
とつたトネだつたが、もはや読めたモノではないそれの宛先が自分ではないことに気づ
く。本来の受取主に手紙を届けるまでの、トネとヌメラの奇妙な生活が始まつた。

目

1.
ちいさな来客

次

1

1. ちいさな来客

モンスター・ボールが八個と、プレミア・ボールが一個。最後にそれを放り込んで袋の口をとうとう縛つた。

旅を終えた今、もう使うこともないものたちだ。少しくらいの寂しさはあるけれど、思い出に取つておくようなものでもない。

だのにきつぱりと捨てる気にもなれなくて、四五リットルの袋で二つ分にもなった旅ごしらえをひとまず部屋の端に追いやつた。

ぱたりとフローリングの床に寝転がる。仰向けのまま腕をかさかさと動かして、ずいぶんとスリムになつたりユツクを引き寄せた。

胸の上でくるくると丸めたそれを後頭部にあてがい、なんてしたところで、タイミングの良いやら悪いやら、ふと玄関のチャイムが鳴る。

「あー……誰だろ、やだな」

のそのそと起き出して姿見をちらと見た。少しだけハネた黒のセミロングに、うつすらと隈に縁取られた茶色の瞳。

そこから視線を下げれば部屋着である飾りつ気のない黒のジャージ上下、中には白地

のTシャツ——ただし『ど根性オタマロ』のイラスト付き——つまり総じて人前に出るのは躊躇われるライン。

着替えは、と考えてはたと気づく。そういえば、見られる服装の類いは今すぐ取り出せる位置にないのであつた。どこぞの段ボール箱に眠つてゐるか、はたまた洗つてある途中か。少なくとも見渡せる範囲には存在しないようだつた。

草むらに入るような気分だ。それも一匹の手持ちもなしに。

ジャージのファスナーを閉め、胸に秘めたオタマロと心中する覚悟を決めた。往生際悪く、手櫛ではねた髪を撫でつけておくくらいはしたけれど。

素足のままスニーカーを履き、ドアスコープを覗き込む。小指の先ほどの穴の先には、はたして誰も居なかつた。

小さなレンズ越しの光景に、ドアノブをひねろうとして、ついでに首もひとつひねつた。

少なくとも知り合いではないだろう。なんせ越してきたばかりで、しかも持ち前の筆不精がたたつて誰もそのことを知らないのだから。

となれば大家か隣人か。壁の薄そうな六畳一間のアパートだ、先ほどまで荷物の整理でどたばたとやつていたのが気に障つた可能性もある。

いやなことを考えた、とげんなりする。謝罪と反省を喉の奥に用意して、やけに重い

扉を開け放つた。

鎬びた蝶番がきいきいと音を立てた。木枯らしの冷えた風が吹き込んで、ジャージの内に滞留していた体温を奪い去つて行くような心地がする。

ドアの向こうのまだ見慣れない景色に目を細める、というより、単に南からの日差しが眩しい。広がつた瞳孔を通り抜けた光が目の奥であはれまわつて、氷を口いっぱいに頬張つたときのような頭痛がした。それをおくびにも出すまいと、努めて口を開く。

「すみません、お待たせしました……？」

誰もいらない玄関先。思わずチャイムに目をやると何やら泥混じりのネバつく液体がべつとりとついている。すわ何かのイタズラかと辺りを見回して、足下近くにワインレッドのキャスケット帽がひとつ落ちているのが目についた。

イタズラ犯の落とし物か、あるいは風に乗つて律儀にチャイムを鳴らしたちいさな来客か。どちらにせよアパート共用部の掲示板にでも吊り下げておけば良いだろうか。なんて考えて、膝を曲げたその時――

「ぬめつ？」

——キヤスケット帽の下から顔を出したのは、二〇センチほどの丸っこいポケモンだつた。

「……ヌメラ？」

「ぬめっ！」

上目遣いにこちらを見つめるつぶらな瞳。薄紫色の体表をぬめぬめした粘液で覆つたボールのような一頭身に、体の半分はあろうかという大きな口——ヌメラというそのポケモンはにへらとだらしなく笑つて、いくらか大きいらしい帽子を額に生えたツノでしきりに押し上げていた。

「わ、かわい……じゃない。これ、チャイム、きみが？」

べとべとになつたチャイムを指差して言うとヌメラはこくこくと大きく頷いた。帽子がずるりとずり落ちる。

指でちよいと戻してやるとヌメラがお辞儀するように頭を下げて、また、ずるり。ぬめ、と悲しげに鳴くのがあんまりかわいくて、にやけそうになる頬を必死にこらえた。しばしして、さて、と仕切り直すようにヌメラは胸を張つた。胸にあたる部位があるかどうかはさておき、そういうふうな動きを見せた。

「それで、どうしたの？ なにかわたしに用かな」

「ぬめ」

今のは肯定の「ぬめ」か、などと思っていると、いつのまにかヌメラは帽子の中に顔をつつこんでいる。ともすればこのぼこぼこと蠢く布のドームは、小さな体にぴつたりの旅ごしらえのかもしだれなかつた。

ほどなくして顔を出したヌメラの口にくわえられていたのは、なにやら白くてでろでろの、てのひらほどのかたまりだつた。

ゆるめていた口元をひくつかせ、ありがとうだなんて空々しくも言つてみる。達成感の三文字が得意満面に書かれた笑顔を裏切ることなど出来るはずもなく、おずおずと左手を差し出した。

受け取つた白いかたまりがダイレクトに伝えてくる不快感をひとまず横において、その正体に思考をめぐらせてみる。

もはや摩つたヤマイモのような有様ではあつたけれど指にへばりつく纖維質には覚えがあつた。むかし何かで見た、植物の纖維を取り出して漉かす光景。これはたぶん、紙だ。

その右下、あるいは反転して左上には黒いシミが付着していて、材質が紙で正しいとするならばこれはインクだろう。となれば――

「これ、手紙？」

「ぬめっ！」

「なんでヌメラに届けさせ……あ――ていうか、あの、ごめん。これなんだけど、にじんでてちょっと読めないかなー、なんて……」

「ぬめっ！」

驚愕、そして落胆。まさになめくじに塩といった様子で、ヌメラは溶けるように力なくしょぼくれはじめてしまった。

慌てて口を開く。なんだか泣き出しそうなヌメラを見て、どうにも黙つていられなかつた。

「ぬめ……」

「あ、や、違う！ 読める読める、ぜんぜん読めるよ。だいじょうぶ、届けてくれてありがとうね」

嘘をついた。全然読めない。まったくもって、これっぽっちだって読める気がしない。ボールペンか何かのインクで書かれた文字なのだろうけれど、これではもはやただの黒いシミだ。アンノーン文字の方がまだ読めるのではないか、なんてふうにすら思う。

ただ、もうひとつ、思うことがあつた。

私はここに来たばかりで、ヌメラはたぶん、それよりも前から手紙を届けようとしていた。つまり宛先は私ではなくこの部屋で、顔も知らない前の住人だ。

言つてしまえば、こんなものは徒労でしかない。届ける相手はもう居ないのに、眼前のヌメラはこの小さな体でぴよこぴよこと無駄足を踏んだのだ。

しかも運んだ手紙は誰とも分からぬ女が素知らぬ顔で受け取ろうとしているだな

んて、考えるだけで気の重くなる話だつた。

ワインレッドのキャスケット帽に右手を置く。ごわごわでぬめぬめの布越しではあつたけれど、なんだか少し温かい気がする。

受け取つた手紙をもう一度見た。粘液をさんざに吸つたそれは宛名すらインクがぼやけて読めないばかりか、そもそも封を開くことすら危うく思える。

そのまま乾かすなどもつての外、粘液でぐずぐずになつた白い纖維は今にもほどけてしまいそうなほどだ。

手紙を運んで来たヌメラを見た。足下どころか体の半分くらいは泥にまみれ、粘液に覆われているにもかかわらず乾いた土くれが付着している箇所すらある。

きつと長い距離をやつて來たのだろう。懸命に歩いた時間は、皮肉なことに手紙に染み込んだ粘液の量が証明している。

その結末が人違いなんて、こんな報われない話があるか。

「……うん、せつかくだし上がってつてよ。まだなんにもないんだけど、ご飯くらいなら出せるから」

「ぬめ？」

まず手紙の確認。それで何かが分かれればよし、分からなければ大家なり隣人なりに聞いてみるところから。目の前で小首を傾げるポケモンのために、私に出来ることはそれ

なりにありそだつた。

（ ）

（ 0 。 ४ 。 ० ）

ところ変わつて浴室。ご飯の前にまずはヌメラをきれいにしよう、なんて意気込んだは良いものの。水色タイルの床にしやがみ込み、蛇口を前にして唸つているのが残念ながら現状であつた。

「おのれドラゴンタイプ……」

濡れないよう透明なビニールの袋に入れたスマホを横に置き、ふがいない検索結果に悪態をつく。どうやらヌメラ種はドラゴンタイプの例に漏れずそもそも生息数が少なく、また飼育難度も高いらしい。検索ボックスに放り込んだ『飼い方』のワードでは望む情報は引き出せないようだつた。

「とりあえず水で洗っちゃおうか。石鹼は使つていいやつか分かんないし」

視線を落とすと白いホーロー引きの風呂桶に入ったヌメラの姿がある。ただし、その頭にキャスケット帽はなく素のままのヌメラだ。

シャワーのレバーを捻る。ぬるま湯ならば問題はあるまい、とたかを括つて、くつづいていた落ち葉などを取りつつ水の温度が上がるのを待つた。

人肌くらいの温度になつた水を指に伝わせてヌメラの頭にかけてみるも、これではど

うやら熱すぎたらしい。ぬめつ、と短く悲鳴をあげて風呂桶から飛びすさるヌメラに慌ててあやまりつつ、温度調整のレバーをまた捻る。

そうか、外温性。調べた情報の中に、ヌメラ種は体温が気温などの環境によつて変化する性質を持っているとあつた。帽子越しの接触では分からなかつたけれど、晚秋も近いこのごろ、ヌメラの体は相当に冷えていたはずだ。

そもそも、ヌメラは日中ですら水分を失うのを嫌つて日陰にじつとしているようなポケモン。人間の基準でのぬるま湯はヌメラにとつて熱湯もかくやであつたに違いない。

ポケモンという生き物のことなのだ。安易に考へるべきではなかつた、とほぞを囁む。

「ごめん、熱かつたね。……このくらいならどうかな。熱くない？」

最低まで温度を下げたシャワーをちよろちよろとヌメラに向ける。先のこともあるてかおそるおそるではあつたけれど、ヌメラは足——節足のようなそれではなく、あくまで部位としての——を伸ばして浴室の床を流れる水に触れた。

ややあつて、ヌメラは風呂桶を小さな浴槽に見立てて透明な水に浸かっていた。水を入れ替えること七回、ようやく水の濁りも取れた。

鼻歌でも聞こえてきそうなほどに満足げな表情を浮かべ、だらりと体を弛緩させてい

るヌメラ。タオルでも額に乗せてみようか、いや、布地に吸われきつてしまふかもしない。そんなことを思うくらいには、どろどろした液体のように溶けていた。

目を閉じてくつろぐヌメラをよそに勢いよく立ち上がると、固まつた膝が悲鳴をあげて思わず喉から鈍い声が漏れた。こちらを向いたヌメラに引きつった笑顔を返して、取り繕つた声をかける。

「うん、きれいになつたね。そろそろ出よつか、ずっと水に浸かつてゐのも良くないと思うし」

「ぬめ？ ぬ～め」

「よしよし、拭いてあげるからじつとして」

びよんと風呂桶から飛び出したヌメラに、真っ白なタオルをあてがう。ところが。当然と言えば当然の話なのだけれど、粘液をすべて洗い流した訳でもなし、軽く水気を取るつもりであてがつたタオルには薄緑色の粘液がべつとりと付着していた。予定変更、風呂桶から水を拭き取り、そこに戻るようヌメラに頼む。

ヌメラが入るサイズの防水加工がなされた器はおそらくこの風呂桶しかない。荷物に侵食された六畳一間のフローリングを思えば、ヌメラにはそれこそ泥をかぶつてもらうしかなさそうだった。

ホーローの刺すような冷たさを両手に味わいつつ短い廊下を歩く。幸いなことにヌ

メラは私のことを愉快なアトラクションか何かだと思つてゐるようで、胸の前に持つた風呂桶のふちから楽しげに顔をのぞかせては引つ込んでを繰り返していた。

ラグも何も敷かれていない剥き出しのフローリング。その真ん中にぼつんと配置された横長の座卓と、風呂桶を取り出すために封を解いて放置した段ボールが数箱。そこに旅の荷物だつたものたちを二袋ぶん加えた、簡素にすぎるワンルーム。それこそが私の新たな住処だった。

座卓の黒茶の天板には白い長方形——先だつてヌメラに受け取つた手紙が置いてある。ヌメラを連れて家に戻つた折、あまりにも脆くくずれそうちだつたためにひとまず置いておいたものだ。

見ればほんの少しは水分が飛んでいるようで、依然でろでろとしてはいたけれど、封筒と便箋の分離くらいならばなんとかこなせそうな様子ではあつた。

抱えていたヌメラ入りの風呂桶を天板に置き、手紙へと手を伸ばす。
はたして取り出した手紙は、案の定と言うべきか、読むことが出来る代物ではなかつた。

薄い植物紙の便箋はあちこち貼りつき、ちぎれ、カビのようになだらなインクがあちこちでシミになつてゐる。寒天培地めいた、糸をひく粘液漬けの白いかたまり。およそ人の怖気を搔き立てる要素がこれでもかと詰まつたそれに、えずきにも似た感覚が背す

じをさすつた。

手紙が貼りつかないよう、崩れないよう、なんとか広げて両の手のひらに乗せる。つまんだ瞬間破けてべちゃり、その光景が目に見えていたために。ぞわざわなんてオノマトペは一切合切知らないのだ。そういうことにした。

ふむ、ふむ、なるほど。白々しくもそんな言葉を吐く。目で文字を追うふりをして、渗透だ青黒いインクを視線でただなぞる。

「……読んだよ、ヌメラ。届けてくれてありがとうね」

「ぬめつ！　ぬめつ！」

ヌメラの顔に浮かぶ喜色満面の笑み。なのにどうにも、目を合わせることが出来なかつた。

ヌメラは自身が風呂桶の中にいることも忘れてか、その喜びを表すように飛び跳ねた。風呂桶ががなりたてるようになに鳴り、危ないのとうるさいのとで苦笑して、やんわりと制止にかかる。

その時だつた。ヌメラが風呂桶のふちに着地して、ひっくり返るように座卓から落下したのは。

「あぶなつ…………！」

座卓の長辺に私、右方の短辺にヌメラ。だから座卓に飛びこむようにヌメラへと両手

を咄嗟に伸ばした。手のひらひとつ分の距離の先に、状況が分かつているのだかいないのだが、口をぽかんと開けてヌメラが逆さになつてゐる。

座卓のふちで腿を、かどで薄い腹をしたたかに打つた。自然、体は右へ倒れ込む。酸欠めいて神経の鈍麻するのを感じ、貧血じみて唇の凍りつくのを覚え、それでも手だけは伸ばしたまま。

やがてフローリングに体を投げ出す形にはなつたけれど、手のひらには確かに冷ややかな感覚があつた。少し遅れてぬるりと粘液が皮膚を撫で、なんとか間に合つたと胸を撫で下ろす。

腿が訴える鈍い痛みであつたり、胃袋からこみあがる吐き氣であつたり、あるいは達成感にも似た安堵であつたり。そんな絢交ぜの頭の中を、深く吐きだした息に乗せた。

ほうほうの体で顔を上げ、両の手のひらの上で目をぱちくりさせるヌメラをみとめた。瞬間、突如ヌメラが赤い光に包まれたかと思えば、光もろともに焼き消え——なぜか床に転がつていた真っ白なボールに吸い込まれていく。

「……へ？　あ、え？　えつ、ちょっと待つて！」

てん、てん、てん。訳もわからぬままプレミアボールが三度揺れ、無情にも鳴り響く捕獲完了のファンファーレ。そういうればそんな機能もあつたつけ、と思うのは現実逃避だろうか。

「なんで？ 人のポケモンじや……」

そんな言葉がするりと口をついて出た。ワインレッドのキャスケット帽、でろでろの手紙、明らかに人馴れしたヌメラ。今まで見てきたもの全てが目の前でのきごとちつとも符合しない。

混乱、そう、混乱している。ヤドンよりよっぽどノロマになつた頭からはうんともすんとも応答がない。何のせいだかも分からぬ冷たい汗が頬をしとど伝つてゐる。

転がつたプレミアボールを手に取り、ボタンを押した。赤い光に形作られるようにボールから繰り出されたヌメラはまたもびよんびよんと跳ね、当然、抗議の意を示すような顔を——違う。

首を振る。わけがわからなかつた。なんせヌメラの顔に浮かんでいるのは怒りではなく、紛れもなく喜びの表情だつたから。

「……ええ？」

ぬめつ、ぬめつ。鼻歌のような鳴き声と、床を叩く粘液の水気を含んだ音。情報量にパンクした頭で、蚊の鳴くような声を漏らした。